
虚無と立派な魔法使い

春夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無と立派な魔法使い

【Nコード】

N2544W

【作者名】

春夏

【あらすじ】

ウルキオラは心を理解し消滅した。だが、ウルキオラは麻帆良学園で目を覚ます。それと同時にウルキオラの霊圧の半分が麻帆良学園女子中等部に通う、和泉 亜子に移ってしまった。

ウルキオラはその和泉 亜子を護りながら心というものを理解していく物語。

1・虚無の旅立ち（前書き）

最初は始まりのような感じですが。

二話は既に書き終わっているのですが、近いうちに更新できます。

1・虚無の旅立ち

そこに何がある？

何も無い

俺は 光の射さぬ穴の底で生まれた。

闇を押し固めたような
なにもものともつかぬ

黒い 黒い

澱の底で生まれた

俺は白い姿をしていた

仲間皆一様に

真っ黒な姿をしていた

真っ黒な姿で

眼を光らせ

歯を剥き出して

何がしかを

喰んでいた

そして

俺には眼しか無かった。

感じるものは無かった

いや或いは

無だということを感じたのかも知れなかったが

聴くこと無く

喰らうこと無く

嗅ぐこと無く

触れて何かを感じること無く

休むこと無く

仲間は無く

ただ

一人

歩いた

何も無い

眼に映るものに意味のあるものなど何一つ無い

眼に映らぬものは

存在すらしない

歩き

歩き

歩き

歩き

歩き

歩き

歩き

歩き

その考えに

至った頃

俺は奇妙なものを見つけた

それは

この世界に点在する得体の知れぬ半透明の物体の

どうやら生まれる場所のようだった

俺は

初めて眼を奪われた

色も無く

音も無く

香りも無く

何に干渉するでも無く

ただそこに点在する

それは今まで眼にした中で
最も無に近い存在だった

俺は

その巨大な無の中に

身を

沈めることにした

そこには何も無かった

俺すらも境界線を失いその無の中に溶けて

一切が消え失せたように感じた

『幸福』

もし世界に幸福というものがあるなら
それは限りなく虚無に似たものの筈だ

虚無とは何も持たぬこと

それ以上何も

失う余地の無いこと

それが幸福でないならば
何がそうだというのだ

眼に映るものに
意味のあるものなど

何一つ無い

眼に映らぬものは存在さえしない

何も無いのだ

お前の中にも

俺の中にも

『心』だと？

貴様等人間は、容易くそれを口にする。
まるで、自らの掌の上にあるかの様に。
俺のこの眼は全てを映す。

捉えられぬものなど無い。

映らぬものは存在せぬもの。

そう断じて戦ってきた。

『心』とは何だ？

その胸を引き裂けば　その中に視えるのか？
その頭蓋を碎けば　その中に視えるのか？

『心』とは

「俺が怖いか 女」

「こわくないよ」

「そうか」

それは 何だ

その胸を引き裂けば その中に視えるのか？
その頭蓋を砕けば その中に視えるのか？

貴様等人間は容易くそれを口にする

まるで――――

そうか

これが そうか

この掌にあるものが

『心』か

心を理解し始めていたウルキオラは、ラス・ノーチエス虚夜宮の天蓋の上で消滅し、
新たな世界へ飛ばされる。

そこは…麻帆良学園都市。

2・亜子の夢（前書き）

駄文ですが、頑張りました。

良かったら見てください。

2・亜子の夢

side 亜子

ウチは麻帆良学園の中等部に通つとる和泉亜子です。

ウチは今、友達三人と学校に登校中です。

「ハア」

ウチは今、大きい溜息をついた。

それに気付いたんか、一緒に登校してるまき絵、アキラ、ゆうなの三人がウチの顔を覗いてくる。

「亜子、何か顔色悪いよ」

ゆうなが心配そうに言うてきた。

「え、そうかな？」

「本当に大丈夫、亜子？」

アキラまで…。

おかしいな、みんなには心配かけへんように笑顔で振舞ってるんやけど。

やっぱ、誤魔化しきれへんか。

「そついえば亜子、最近よく魔されてるよ」

まき絵に突かれたくないところ突かれてもうた。

そうです。

ウチは今、一つ悩みを抱えてるんです。

夢

ここ最近、メツチャ変な夢を見続ける。

哀しくて、寂しくて、切ない夢。

とても鮮明に憶えてる。

「う…っ！」

何や、急に頭が痛く…！

あまりにも痛みにも自分の両手で頭を抑え、歩く足を止めた。

「ちよっ、亜子どうしたの！？」

三人がウチの異常な状態にあたふたし始めた。

「頭が…痛い…！」

ウチは消え行く意識の中でそう言った。

そして、意識を失った。

あれ、ウチ、どうなったんやろ。

戻ってくる意識の中、ゆっくりと目蓋を開けた。

そこは夜で、三日月の月が空にある。

そして、どこかの建物の上なのか、建物に穴が開いたりしてボロボロな状態や。

そこにウチ以外に四人の男女がいる。

オレンジ色の髪の毛メツチャかつこえー男の人。
眼鏡をかけたメツチャ賢そーな感じの男の人。
ウチより何倍も綺麗な女の人。

そして、何か黒い羽が生えてる男の人がいる。

その男の人はオレンジの髪の毛の男の人と何か話してる。
けど、何を話してるか聞こえへん。

そしたらいきなり、黒い羽の男の人が消え始めた。
その姿を見たオレンジの髪の毛の男の人が悔しそうに何か叫んでる。

そして、消え始めた男の人が女の人に手を伸ばして、何か言ってる。
女の人はそれに答えるように何か言ったら、その手を掴もうとしたんか、女の人も手を伸ばした。

けど、掴む寸前で男の人の手が消え、完全に消滅してもうた。

たった、それだけやのに胸が痛む。

ウチはこの夢を何回も見た。

もう、見たく無い。

「ん、此処は…？」

どうやら、あの夢から覚めたようだ。

「此処は保健室だよ。和泉さん」

と、ウチのすぐ横から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「高畑先生」

そこにはウチら2・Aの担任がいた。

眼鏡と無精髭がトレードマークの男性だ。

「皆心配していたよ。和泉さんが倒れたって聞いた時」

「スイマセン。ウチのせいでみんなに心配かけてもって」

「謝らなくて良いんだよ。それより、身体の方はもう大丈夫かい？」

「はい。もう大丈夫です」

大丈夫かと言われれば大丈夫な方やるな。

あれ、もう夜。

保健室の窓の外を見たら真っ暗。

一体何時間寝てたんやろ。

「じゃあ、僕が女子寮まで送るよ。暗いし、夜は危ないからね」

「ありがとうございます」

こうして、ウチは高畑先生と一緒に女子寮まで向かった。

暗い夜道を二人で歩いている。

時間は分からへんけど、多分結構遅い時間や。

「おつと、そうだった。和泉さん、僕はこれからちょっと用事があるんだ。ここからは一人で大丈夫かい？」

「はい。大丈夫です」

ここから寮まではもう目と鼻の先。
一人でも十分大丈夫な距離や。

「そうかい。それじゃあ、明日は学校が休みだからゆっくり体を休めると良いよ」

高畑先生はそう言って、足早に去っていった。

「早く帰って、みんなを安心させなな」

と、どこからかあの感じがした。

この感じ!？

この感じは…あの夢の。

S i d e o u t

和泉亜子は寮とは違う道へと歩いていく。

自然と行かなければいけない感覚に陥ったのだ。

そして亜子はある人物に出会うことになる。

3 ・ 出会う（前書き）

キャラ崩壊しているかもしれませんが、頑張りました。

3・出会う

暗い森の中に一人の男が仰向けで倒れている。

その男は白い着物をコート状にしたような物を着ている。
帯刀しており、孔が喉元に開いている。

そして、角が生えた仮面の名残を左頭部に被っている。

その男がゆっくりと目を開ける。

side ウルキオラ

意識が…戻る…。

なぜ、消滅した自分の意識が戻るんだ？

俺は目を開け、ゆっくりと立ち上がる。

周りを見渡すが見たことの無いところだ。

此処は何処だ？

なぜ、俺は生きてる？

なぜ、俺の霊圧が半分程消えている？

俺の頭に色んな疑問が過るが、まずは適当な奴を見つけて此処が何
処なのかを聞き出すか。

ベスキス
探查神経を使う。

ベスキス
探查神経とは相手の霊力の強さや所在を測る能力。
何人か力の持った奴がいるな。

それに、一人俺の方に近づいている奴がいる。
ちょうど良い、そいつに聞かか。

だが一つ、そいつの力に不可解な事がある。

霊圧が安定していない。

常に霊圧が揺れ動いてやがる。

探索神経で力を測ってみたが、揺り幅が尋常じゃない。
ベスキス

低い時の霊圧はゴミみたいなモンだが…高い時の霊圧は今の俺とほぼ同等…。

…どういうことだ…一体…？

似たような体験は一度したことがある。

黒崎一護だ。

だが、黒崎一護とは何か違う。

俺の測った奴の力は、本当にそいつ自身の力なのか…？

…そんな事を考えているうちに、そいつがすぐそこまで来ていた。

s i d e o u t

s i d e 亜子

何でやる？

こっちに行かなアカン気がする。

引き寄せられるような感覚。

恐怖や好奇の感情は無く、ただ行かなくちゃという責務や義務のような感じがする。

「また、頭が痛くなってきよった」

進む事にどんどん頭が、身体が、痛く熱くなってくる。
けど、立ち止まる事はできひん。

もしかしたら、この痛みの正体がかかるかもしれへんのや。
何の根拠も無いけど。

因みにウチは今、暗い森の中を歩いています。
正直、メツチャ怖いです。

そして、遂にウチはあの人に会ってしまった。

s i d e o u t

s i d e ウルキオラ

そいつが俺の前に現れた。
どうやら、女だったようだ。

俺の姿を見て硬直し、信じられない物でも見ているような目をして
いる。

女の顔が赤い。

それに息遣いも激しい。

苦しんでいるようだな。

「女、此処は何処だ？」

こいつの力は後だ。

まずはこの場所が何処なのかを聞き出す。

「え……」

突然俺に声を掛けられ驚いたようだ。

「えっと、ここは日本の麻帆良学園ってところです」

麻帆良学園：知らないな。

だが、此処が日本だということは分かった。

「え、えっと、一つ聞いて良いですか？」

女が俺に何か聞きたいようだが、先にしなければいけないことがある。

俺は何かの力を感じる方に顔を向ける。

「ど、どうしたんです？」

女は俺の動きが気になったのか聞いてくるが、答える気は無い。
と、森の奥から虚^{ホロウ}？のような連中が現れた。

いや、こいつらは虚^{ホロウ}じゃない。
鬼という奴に似ている。

まあいい、こいつらからは敵意を感じる。
消すか。

side out

side 亜子

何で、夢で出てきた男の人がここにいるんやろ。

格好はちゃうけど、夢で見た男の人はずや。

こんなん有り得へん。

でも、意外と冷静なウチにも驚く。

それに、この男の人と会った途端、頭の痛みと身体のダルさが少しだけ楽になった気がする。

男の人にいきなり此処は何処だ？と聞かれたから答えたけど、何で自分のいる場所が分からへんのやろ。
せや、ウチも聞きたい事がある。

「え、えつと、一つ聞いて良いですか？」

ウチが何かを聞こうとした途端、男の人が急に顔を逸らしてきた。
あれ、ウチ嫌われたんかな？

「ど、どうしたんです？」

恐る恐る聞いてみる。

その刹那に私はある禍々しい変なものを感じた。

初めて感じる感覚。

これって一体？

と、その感じていたものがすぐそこまで来たのが分かった。

「な、何…この、人達」

人…いやちゃう。

これは鬼。

何で鬼がいるねん！？

s i d e o u t

3 ・ 出会う（後書き）

感想やご意見 よろしければお願いします。

4・名前（前書き）

サブタイトルが適当な気がする。

4・名前

鬼。

今、それがウルキオラと亜子の目の前にいる。

一体や二体ではない。

何十体もいる。

亜子は夢じゃないかと思い、頬っぺを指で抓るが悲しいことに痛い。これは夢では無く、正真正銘の現実だつてことを亜子は改めて理解した。

side ウルキオラ

「何や、こいつ？」

鬼の一体が俺を指差しながら、周りの鬼に聞いている。

「知らんけど、感じたことの無い力を感じるな」

一体の鬼が答えた。

時間の無駄だな。

「おい、お前。何モン…」

一番先頭の鬼が一步前に出てきた。

だから、俺は手を出し虚弾^{ハラ}を放った。

鬼は訳も分らず体が消し飛び消滅した。

「な、何すんねんお前!？」

一体の鬼を消したのに怒ったのか、仲間の鬼が一斉に俺に掛かってきた。

「ゴミが」

目障りだ。

俺は再び虚弾^{バラ}を使い、鬼には見えない速度で放つ。

鬼共は何をされたのか理解できずに消えていく。

「下らん」

鬼共は十秒も経たないうちに全滅。
呆気無さ過ぎる。

「あ、あなたは一体、何者なんですか？」

青ざめた表情をした女が俺に向かって何者かと聞いてきた。
今にも失神しそうだな。

「ウルキオラ・シファー」

別に答える必要は無かったが、答えておかないとこの女が倒れそうだったので答えた。

それ程までにこの女は失神寸前の状態に陥っている。

俺はまだこの女のことに対し、知りたい事が残っている。

「女、お前のその霊圧は何だ？」

「え、霊圧…？」

こいつ、霊圧を知らないのか？
それで霊圧を持っているだと？

まさか…

俺は女の額に軽く触れる。

女は体を強張らし、強く目を瞑った。
俺が何かするとも思っただのか。

…やはり、こいつの霊圧は俺の物だ。
なぜ、俺の霊圧がこいつの体に移っている？

…成程。

こいつが苦しんでいた理由が少し分かった。
こいつは俺の霊圧に魂魄が耐え切れずに、苦しんでいたんだ。
だが、不思議だ。

普通の人間が俺の霊圧を耐え切れる訳が無い。
なのに、こいつは耐えている。

なぜ移ったのかは今はどうでもいい。

「面白い人間だ、女」

少し、この女に興味が出てきた。
ちょうど良い感じに血の気が引いた女の顔が正常に戻っていった。

「名は何だ？ 女」

「え、えっと、和泉亜子です」

和泉亜子…憶えておく価値はありそうだ。

S i d e o u t

s i d e 亜子

鬼たちが一瞬で男の人に全滅させられた。
怖かった…っていうか、氣い失いそうだった。
けど、目を逸らされへんかった。

ウチが何者かと聞くと、普通に答えてくれた。

ウルキオラ・シファア…！ かつこえー名前。

そのウルキオラ…さんがウチのおデコに触れてきた。
怖かったけど、何か気が楽になった。

ウルキオラさんは手を引つ込めると、ちよつと驚いた表情をした。
何に驚いたんやろ？

そしたら次はウチの名前を聞いてきてくれた。
何でやる。

少し嬉しかった。

ウチは喜んで答えた。

その時やった。

ウチらを囲うように先生方が現れた。

メツチャびつくりした。

え、てか何で先生たちが…しかも高畑先生もおるんやけど。

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

何だこの人間共は？

敵意は感じるが、それよりも恐怖という感情の方が強い。

「誰だ、貴様等は？」

四人か。

まともに俺と戦えそうなのは居ないが、強いていうなら俺の前に立つ男くらいか。

「僕達はこの学園の先生だ。だから不審人物が居たら放って置く訳にはいかないんだよ」

だから此処に来たのか。

真つ当な理由だな。

「で、俺をどうすると？」

「あなたを少しの間、捕縛します」

正気か？

貴様ら四人が纏めて掛かって来ても俺には勝てない。

こいつらはそれを理解していないのか？

いや、そこまでバカじゃないだろう。

そう思ったのも束の間、四人とも臨戦態勢に入った。
そこまでのバカだったようだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

女が俺の前に立って四人を止めた。

「ウ、ウチ、この人…ウルキオラさんに鬼から助けられたんです！
この人は何も悪いようなことはしてません！」

女が必死で弁解する。

それが効いたのか、四人は気が抜けたように態勢を崩した。
警戒心が少し足りてないな。

「和泉さん…。あれ、どうして和泉さんが此处に居るんだい？」

今頃気付いたのかこの眼鏡は。
それ程、緊張していたという事が。

「え、えっと…」

答えるのに随分と困っているな。
仕方ない。

「貴様らの上に立つ人間は誰だ？」

俺はこいつらに聞きたい事があるが、こいつらより上の人間に聞いた方が高率が言いだろう。

「それを聞いてどうする？」

「会いに行くだけだ」

俺がそう言つと、四人は目で何かを合図するような素振りを見せる。

「分かった。良いだろう。学園長の所まで案内しよう」

その言葉を聞いて女が安心したかのように息を吐いた。

眼鏡を掛けた男が背を向け歩き出した。

それに続いて他の三人も歩き出す。

警戒心が有るのか無いのか分からない。

女はどうして良いか分からず困っている。

「お前も来い、女」

俺はそついい歩き出す。

女は安心したように俺の後ろを歩く。

S i d e o u t

4・名前（後書き）

感想やご意見　よろしければお願いします。

5・学園長の判断

ウルキオラと亜子は四人の先生に連れられ、麻帆良学園の学園長が居る学園長室に向かっている。

舗装された道路を街灯が明るくしている。

夜なので周りの光景はよく見えない。

それ以前にウルキオラは周りの光景に全く興味を示さなく、前だけ見て歩いている。

その前を歩いている先生方はあまり気持ちの良いものではなく、逆に悪寒がする。

亜子はそのウルキオラの隣を歩いている。

一同は全く口を開かず、黙々と歩いた。

そして、数十分歩くと大きい建物まで着き、そこに入り学園長室まで向かった。

side ウルキオラ

何だ、このふざけた頭は。

今、俺の目の前に人間らしからぬ頭をした老い耄れがいる。頭の形は世にいう妖怪のぬらりひょんに似ている。

本当に人間か？

「学園長、連れて来ました」

眼鏡の男が老い耄れにそう言った。

「うむ、すまぬの。四人共、下がって良いぞ」

何？

この老い耄れは警戒心が全く無いのか。

見ず知らずのこの俺と二人きりで…危険が無いとでも思っているのか。

いや、三人か。

正常な人間共は老い耄れの指示に必死で反対している。

その結果、高畑という男だけが残る事になった。

「では、早速本題に入ろうかの。と、その前に…」

老い耄れの目の先が俺の隣にいる和泉亜子に移る。

「君はタカミチ君の生徒じゃな？」

「は、はい。2 - A組の5番、和泉亜子といいます」

随分とこいつは礼儀が正しいらしいな。

「…成程の。これはまた面白い展開じゃな」

この老い耄れは何を考えているんだ？

「学園長、一体何を考えているんですか？」

高畑という男が俺が言おうと思っていた事を聞いた。

「気付かぬか。和泉亜子君から、その男と同じ異質の力を感じるんじゃないよ」

それを聞いた高畑がかなり驚いていた。

異質の力：霊圧のことか。

そういえば、こいつらからは俺とは全く違う力を感じる。
少し気になるな。

「ところで、此処はまずお互いの情報を公開せんか？ 勿論、言える範囲までの」

悪くない提案だ。

俺は老い耄れの提案を飲んだ。

まずは俺から霊圧、ホロウ アランカル虚、破面、死神の事を教えた。

勿論、俺が死んで目覚めたら此処に居たとは言わず、寝ていたら此処に居たと言った。

その後に俺の霊圧が半分程、和泉亜子という女に移ったと言った。

その事を聞いた和泉亜子はかなり驚いていた。

そつえば話していなかったな

俺の情報を聞いた老い耄れもそつちの情報を話し始めた。

魔法使い、関東魔法協会、魔法世界、麻帆良学園等々を聞いた。

俺は知らない事を一気に聞いたが理解はできた。

和泉亜子の方は魔法関連の事も知らなかったらしく、困り果てている。

「うむ、中々興味深い事が聞けたの。そついえば、まだ名前を聞いとらんかったな」

「ウルキオラ・シファーだ」

「ワシは近衛 近右衛門。 どうじゃ、ウルキオラ君。 此処で働いて
みんな？」

…一瞬だが思考が停止してしまった。

この老い耄れが唐突に訳も分からない事を言い出したからだ。
俺を此処で働かすだと？

正気の間人が言う沙汰では無い。

「どうじゃ？ 勿論、衣食住には困らんようにする」

普通の奴なら喜んで働くだろうな。

「ちよつと学園長！ 何を考えておられるのですか！？」

高畑が普通の反応をする。

「心配せんでも良からう。 何たってウルキオラ君はうちの生徒を鬼
から守ってくれたそうじゃし」

この老い耄れ、俺が鬼を消した事を知っていたのか。

成程。

此処には少しだが、面白い人間が少なからず居るみたいだ。

「良いだろう。 此処で少しの間働かせてもらう」

俺の予想外の答えに和泉亜子も高畑も驚いている。

「うむ、では君には高畑君のクラスの副担任を任せようかの」

「え、僕のクラスの副担任ですか!？」

高畑が驚いている。
よく驚く奴だ。

「何か問題でも有るのか？」

「教員免許はどうするんですか？」

「そんなもんバレなきゃ良いんじゃないよ」

この老い耄れは後々後悔するかもな。
高畑はそれを聞いて何も言えなくなつた。

「では決定じゃな。詳しい事は明日の午前に此処で説明する。まあ、直ぐに終わるじやろうけど」

「分かつた」

午前に此処にか。

面倒だが、直ぐに終わるようだから行くとするか。

「それと君が住む所はあゝ、和泉亜子君の部屋にしたいんだが」

「え！　ウチの部屋ですか!？」

和泉亜子が直ぐに反応した。

「どうじゃね？」

老い耄れが片目だけ開いて聞いている。

「は、はい！ 大丈夫です！」

本当に大丈夫なのか？

それに、俺に聞いていたんじゃないのか。

「うむ、決定じゃの。では、今日のところはこれにて解散とする」

老い耄れがそう言うと、俺と和泉亜子は部屋から出て行った。

Side out

Side 近右衛門

ウルキオラ君と亜子君が部屋から出て行った。

「学園長、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「問題無いじゃろう」

問題があるとすれば、魔法先生・生徒がウルキオラ君を見て、どう反応するかだ。

ウルキオラ君が生徒を助けたのは事実じゃが、力が異質じゃ。

危険や恐怖等を感じる人もおるじゃろ。

まあ、それは時間を費やしながら信頼を得るしかないな。

とりあえず、明日はウルキオラ君の事を紹介して、危険が無い事だけ言おう。

「それと学園長。別に和泉さんの部屋に泊めなくても教員寮が空い

ていたんじゃない…」

「それはの、ウルキオラ君の甘い恋バナが聞けたらというワシの願望じゃ。あそこ女子寮だから、きつと上手くいくはずじゃ」

「絶対に無いと思いますよ。それに、あの人は男だから女子寮は…ちよつと駄目なんじゃ」

今さらじゃの。

「心配せんでも、彼だけ特別じゃ。学園長宣言だから大丈夫」
多分じゃがな。

S i d e o u t

5・学園長の判断（後書き）

感想やご意見 よろしければお願いします。

6・採用

明朝、ウルキオラは近右衛門に言われた通り、学園長室に和泉亜子と向かった。

学園長室に入ると生徒や先生、シスター姿の人までいる。

皆はウルキオラの姿を見て、明らか分かりやすい驚きをしている。

和泉亜子は知り合いが居たのか少し驚いていた。

近右衛門は全員揃った事を確認すると、ウルキオラと和泉亜子について話し始めた。

それを聞いた生徒や教師は不審を抱かずにはいらなかった。

だが、学園長の一任つてことで一応全員考慮した上、承知した。

こうしてウルキオラは2-A組の副担任に採用された。

side 亜子

あゝ緊張したあ。

まさか、あんなに魔法使いの先生と魔法使いの生徒がいたなんて。それに生徒の中によく知ってる人もいたし。

何かウチのこれからの人生が一気に変わってしもつたみたいやわ。

因みに今、ウチはウルキオラさんと二人で学園都市をぶらぶらと散歩しています。

もう、朝の10時頃や。

そついや、まだ朝食を食べてへんかったな。

つていうか、昨日の夜色々ありすぎて夕飯も食べてへん。

あゝ、ご飯の事考えたらお腹減ってきたなゝ。

「あの、何か食べませんか？ 昨日の夜から何も食べてませんし」

「ああ」

あれ、ええの？

つてきり断られると思ったんやけど。

後、ウルキオラさんって何が好きなんやろ？

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

今になって気付いた事がある。

今の俺は霊体ではなく人間と同じ人体。

だから、周りの人間に俺の姿が見える。

それに、人体という事はちゃんとした人間の食物を食さなければなら
ないだろう。

先刻、老い耄れから通貨の入った封筒を買った。

封筒の中に入っている金額を見てみたが、かなりの額だ。
随分と気前の良いことだ。

「あの、何か食べませんか？」

和泉亜子が少し顔を赤らめ言ってきた。

そっいえば、昨日から何も食べていないな。
ちょうど良いだろう。

「ああ」

俺は和泉亜子の言葉に乗った。

だが、俺は人間の食い物にそう詳しくは無い。
こいつに任せるか。

Side out

side 亜子

えーと、ウルキオラさんって何が好きなんやろ？
困ったなあ。
聞いてみよつと。

「ウルキオラさんは何か食べたい物とがありますか？」

「いや、お前に任せる」

任されてもうた。

うーん、どないしょ。

やっぱここは定番のファーストフード店がええのかな。

「あ！ 亜子発見！」

と、聞きなれた声が聞こえてきた。

ウチは後ろを振り向く。

そこにはまき絵、ゆうな、アキラがいた。

正直、今は会いたくなかった。

「昨日は心配したんだよ。あんな夜遅くに帰ってきて、そしたら朝早くから居なくなってるし」

まき絵がウチの事を心配してくれてる。

昨日は学園長室から寮まで帰った。

その際にウルキオラさんの背中に負ぶさって、凄い速さで寮に着いた。

寮部屋に帰るとまき絵が寝えへんと起きてた。

魔法の事とかは他言無用ってことで適当に作った訳を話して、その日は寝た。

そして、朝早くからまき絵を起こさんように出て行ってもうたから心配してたんやろ。

「ゴメンな皆。けど心配あらへんから」

「いや、心配しない訳ないでしょ」

ゆーなが尤もな事を言う。

「あれ、隣の人は誰？」

まき絵がウルキオラさんを見て聞いてきた。
やっぱりというか、絶対聞かれると思った。
どう答えたらええんやろか？

…あ、そうや。

「今度、2 - A組の副担任に採用されたウルキオラ先生や」

この事って言っても良かったんやろうか？

まあ、どうせ明日になれば嫌でも分かる事やからええか。
それを聞いた三人は声を上げて驚いた。

「えー聞いてないよそんな事！？」

まき絵が驚きついでに言ってきた。
聞いてないって言われても、昨日決まった事やから知らんくて当たり前やけど。

どう言おうかな？

「それに何で亜子はその先生と一緒にいるの？」

あちゃー、アキラに一番突かれないとこ突かれた。

「えーと、実は先生とウチは親戚同士で仲がええから、一緒に学園内を案内してるねん」

「へー亜子の親戚の人だったんだ」

咄嗟に思いついた嘘やけど皆信じてくれた。
でも皆に嘘ついたせいで罪悪感が。

「あ、私は亜子の友達の明石裕奈といいます」

ゆーながウルキオラさんの前に立ち自己紹介をした。

「私は亜子と同じ部屋の佐々木まき絵です」

次にまき絵が自己紹介をした。

まき絵は今日の夕方頃に紹介しようと思ったんやけどな。

「大河内アキラです」

アキラはペコリとおじぎした。

…ウルキオラさんは自己紹介しないのかな。

「…ウルキオラ・シフアーだ」

良かった。

ウルキオラさんも名前言ってくれた。

「あれ、外人さんなんだ？」

…あ、そうや、ウルキオラさんって完全に外国人の名前やんか。
ウルキオラさんって外国人なんかな。

「そうだ。私たちも亜子と一緒にウルキオラさんの学園案内のお手伝いしようよ」

まき絵が提案した。

ウルキオラさんと二人より正直こっちの方が気が楽かも。

っていう事で、四人でウルキオラさんの学園案内をすることになった。

S i d e o u t

それから五人で学園中を回った。

一日では回れない程敷地面積が広く、年度初めには迷子が出るくらい。

朝はファーストフードで済ませ、昼は適当な飲食店で済ませた。

亜子はこの学園案内でウルキオラの事を少しだけ知った。

ウルキオラの食べる量は見た目通り少なめで、ゆっくり味わって食べると。

そして、夕方になり五人は寮に帰った。

6・採用（後書き）

感想やご意見　よろしければお願いします。

7・大浴場

ウルキオラ達は女子寮に帰ってきた。

一応まき絵達三人にはウルキオラが女子寮の亜子とまき絵の部屋に泊まる事は伝えてある。

アキラと裕奈は自分の部屋に戻り、亜子とまき絵はウルキオラを自分らの部屋に入れた。

亜子とまき絵の部屋は662号室。

因みにウルキオラは昨日、亜子とまき絵の部屋には行かず、外に居た。

部屋の中には二段ベットが有り、小物や机、テーブルにソファ等がある。

亜子は夕飯を作るために台所に向かった。

ウルキオラはその間にこの学生寮の事をまき絵から聞いた。

ここで初めてウルキオラは女子寮だと分かった。

だが、全く気にしていない。

まき絵の説明が終わると、亜子が夕飯をテーブルの上に並べた。

三人は夕飯を食べ、後は風呂だけとなった。

side ウルキオラ

飯を食い終えた俺は高畑から貰ったクラス名簿のコピーを見ている。生徒の写真の所々に手書きで追加書きがされている。

明石教授の娘さん、学園長のお孫さん、京都神鳴流、龍宮神社、忍、双子、パソコンが得意、困った時に相談しなさい等。

正直どうでもいい。

ただ写真だけだから分かんが、並外れた力を持っていそうな奴がいるな。

1と10に至っては人間ではない。

俺がクラス名簿を見ていると携帯電話の着信音が鳴り響いた。携帯電話は古い耄れから連絡用として持たされた。

使い方は使用法の本を読み、ある程度は理解している。

俺は携帯を手に取り、電話に出る。

「もしもし、わしじゃ」

古い耄れからだった。

「何だ？」

「ウルキオラ君は風呂をもう済ましたか？」

風呂、湯浴みのことか。

「まだだが」

「そうか。それは良かったわい」

何だ？

古い耄れが急に明るくなりやがった。

「実はの。その寮には自慢の大浴場が有るんじやよ。そこに行ってみたいと思わんか？」

自慢の大浴場か。

興味無いな。

「部屋に湯浴みのできる所が有る。一々そこに行く必要など無い」

こんな下らん事の為に電話をしてきたのか。
随分と暇人だな。

「駄目じゃ。君には大浴場に行ってもらわねば困る」

「困るだど？」

「うむ、この学園に入った者は誰であろうと最初の風呂は大浴場に入らねばならないという風習があるんじゃない」

風習だと。

なぜ、そんな下らん事を守る必要がある？

だが郷に入っては郷に従え。

一応、老い耄れにも貸しが有る。

仕方ない。

今回だけ言う通りにしてやるか。

「分かった。その大浴場に行つてやる」

「おお！ 本当か！ いや、すまぬの」

老い耄れが随分と喜んでいるな。
裏が有りそうだ。

「ではな」

そういい、老い耄れは携帯を切った。
俺は携帯を閉じ、椅子から立ち上がる。

そして、今日購入した着替えとタオルを手を持つ。

「あれ、ウルキオラ先生お風呂に入るの？」

佐々木まき絵が聞いてくる。

「ああ、学園長が大浴場に行けというから、そこに行く」

周りの奴に老い耄れの事を言う時は一応学園長といっている。

「「え…えええー！！」」

二人が驚く。

何をそんなに驚いているんだ？

「ほ、本当に行くん？」

なぜそんな事を聞くんだ？

「ああ。なぜ聞く？」

「い、いや、何でもないけど」

「そうか」

だったら、なぜ聞いた。

俺は着替えとタオルを持ち部屋から出た。

S i d e o u t

S i d e 亜子

うーん、やっぱちゃんと止めたら良かったかな？

この寮は女子寮。

即ち女の子しか居いひん。

つまり、大浴場を使うんは女の子だけ。

けど、ウルキオラさんは男の人。

あー、どないしょー。

この時間帯なら多分誰もおらんと思うから大丈夫やろうけど？

「ねえ、亜子。ウルキオラ先生って此処が女子寮だって知ってるよね？」

「そら知ってるやろ。何回も言ったんやから」

ウルキオラさんには此処に帰ってくる前に何回か此処が女子寮だって事は言っている。忘れてる訳がない。

「もしかしてさ、ウルキオラ先生って男女の性的な概念が無いんじゃないの？」

それは…有り得るかも。

と、部屋のチャイムが鳴った。
多分、ゆーなとアキラやろ。
ウチは部屋の扉を開ける。

「ヤッホー亜子、まき絵！ 大浴場行こう！」

予想通りゆーなとアキラだった。

…え、大浴場に？

「この時間帯なら誰も大浴場を使ってないと思うから、貸し切り状態だよ」

あちゃー、間悪すぎるやろ。

今行ったらウルキオラさんと鉢合わせやんか。

「あれ、ウルキオラ先生は？」

アキラがウルキオラさんの居ない事に気付いた。

「ウルキオラ先生は今、学園に行っていないよぉ」

「え、まき絵何を」

ウチがそこまで言うと、まき絵に手で口を押さえられた。

「亜子も気になるでしょ。ウルキオラ先生が異性に興味があるかどうか」

まき絵がウチの耳元で二人に聞こえんように言った。

ウルキオラさんが異性に興味があるかどうか。

正直いってウルキオラさんは男女問わず、強い人？とかにしか興味がない気がする。

「分かった」

まあえっか。

何か大切な事を忘れてる気がするけど。

そしてウチらは大浴場に向かった。

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

悪くはない。

色んな湯船が有り、観葉植物まで有る。

そして、かなりの広さだ。

軽く100人くらいなら一遍に入っても問題なさそうだ。

一体いくら金を掛けているんだ？

それに今は誰も居ないな。

ちょうどいい。

一人の方がゆつくりできる。

俺は適当な湯船に浸かる。

「悪くない」

ちょうど良い湯加減だ。

だが…

「此処まで来て入ろうとは思わんな」

あの老い耄れの事だ。

どうせ、何か裏が有るだろう。

風習など関係無しに、違う目的が有るはずだ。

俺はあの老い耄れを純粹に信じる事が全くだけない。

俺は何が来ても良いようにしていると、着替え場から話し声が聞こえてきた。

どうやら誰か来た様だ。

…この霊圧は亜子か。

他に三人いるな。

恐らく、今日一緒にいた三人だろう。

そして四人が大浴場に入ってきた。

S i d e o u t

S i d e 亜子

ウチはあんま乗り気や無いまま大浴場の更衣室までやってきた。予想通り、ウルキオラさんの衣服があつた。

まき絵は気付いたようやけど、二人はまだ気付いとらん。

そして、直ぐにウチを含めて三人とも衣服を脱ぎ終えた。

ウチらは大浴場の中へと向かう。

…あれ、今気付いたけど。

ウチ裸やん！

お風呂やから当然やけど。

でも、此処にはウルキオラさんが居るんや。

なんか、メツチャ恥ずかしいやん！

それに、背中傷だけは見られとうないし。

ウチらが風呂場に入ると真っ先にウルキオラさんが目に入った。

頭が爆発しそうになった。

一応タオリを全身に巻いているけど、やっぱりメツチャ恥ずかしいわ。

他の三人もタオルは全身に巻いている。

「何だ、やはり貴様等か」

ウルキオラさんが冷静に言ってくる。
全然驚いとらん。

「え、あの、何でウルキオラ先生が…？」

ゆーながウルキオラさんに聞く。

「学園長の命令でだ。和泉亜子か佐々木まき絵から聞いていないのか？」

「いえ、聞いていません」

アキラが冷静に答える。

アキラもあまり恥ずかしがっていないのかな？

「ねえ、まき絵。ウルキオラ先生って学園に行ったんじゃないの？」

ゆーなが横目でまき絵に聞く。

「えーと、どうやら聞き間違えたようなのだ！」

まき絵が笑って誤魔化す。

「仕方無いか。私たちも体洗って湯船に浸かろう」

あれ、ウルキオラさんが居るのに気にしないんや。
どうしてやる？

「別にウルキオラ先生は私たちを厭らしい目で見て無いし、それどころか全く興味なさそうだからね」

ウチの心の声が聞こえたように言うゆーな。

たしかにウルキオラさんはウチらをそんな感じでは全く見ていない。

ウチらは体を洗い、湯船に浸かった。

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

最後まで何も無かったか。

俺の考え過ぎか。

四人は和気藹々と話しているが、時折こつちをチラチラ見てくる。
一体何を話しているんだ？

「そろそろ上がるか」

もお、十分だ。

俺は湯船から立ち上がる。

理由は分らんが、四人が顔を真っ赤にさせ俺を見ている。

理由を聞くのが面倒だったので俺はとっとと着替え場に向かった。

最後の最後まで何も無かったという事は老い耄れは本当にただ此処に行けと言っただけだったようだ。

S i d e o u t

S i d e 亜子

ウルキオラさんが大浴場から出てった。

これで分かった。

ウルキオラさんはやっぱり男女の性的な概念が一切無い。

何でやる？

少し悲しい気がする。

まあ、そっちの方がウルキオラさんらしくてええけどな。

S i d e o u t

7 大浴場（後書き）

感想やご意見 よろしければお願いします。

8・自己紹介

朝になるとウルキオラは亜子達より一足先に学園に向かう。

学園までは解空デスコレルを使い、一瞬で移動する。

解空とは空間に裂け目を生み出し、一瞬で遠い場所にも移動できる技。

いわゆる、どこでもドアという有名な道具と似たようなものである。ウルキオラは学園に着くと、学園長室に向かった。

学園長室に着くと、近衛と高畑が居た。

二人共ウルキオラに挨拶をするが、ウルキオラは挨拶を返さない。

まあ、二人共返さない事は分かっていた。

そして、近衛は本題を話し始める。

S i d e 近右衛門

「さて、ウルキオラ君は昨日渡した英語の教科書をどこまで覚えれたかのう？」

昨日ウルキオラ君には携帯等を渡す時に、一緒に英語の教材も渡した。

一応表向きは教師なので学識が無ければならない。

でも、一日ではそれ程覚えるのは不可能じゃろう。

「全部だ。貴様が渡した英語の教材は全て暗記した」

全部じゃあ！？

ウルキオラ君は英語の教材を全て一日で覚えたのか。人間のなせる領域を超えとるのう。

「なら問題ないの」

これなら多分、教師としてやっていけそうじゃな。

side out

side 亜子

ウルキオラさんはウチらより先に学園に行ってもうた。

ウチらもウルキオラさんが出てって少ししてから学園に向かった。

教室に着くと既に皆の姿があった。

皆が一昨日の事でウチの事を心配して来て声をかけてくれた。

だからウチは心配ないことを言って、心配してくれたことにお礼を言った。

そしてウチが席に着くと同時に一人の生徒が教室に入ってきた。

「みんなあゝ！！ 大スクープだよ！！」

入ってくるなり皆に声を掛ける。

相変わらず、よく響く声やな。

その大声に皆がその生徒の方に顔を向ける。

その生徒の名前は朝倉和美といって、報道部に所属しているスクープ好きの人。

「で、何が大スクープなの？」

一人の生徒が聞く。

「それは…このクラスの高畑先生の副担任が遂に決まった事です！
！」

「「「ええー！ー！！！！」」」

大スクープに皆が驚きの声を上げる。

いつも、そういう情報をどこから手に入れてくるんやろ？

「どういう人なの！？」

「イケメンなの！？」

「強いアルカ！？」

皆が副担任の事で朝倉さんに質問責めしとる。

「えーと、実は私もあまり知らなくてさ、一体どんな感じの人は知らないんだ」

まあ、そうやるな。

その話を聞いてか、いつもの三人がウチに近寄ってきた。

「ねえ、亜子。副担任ってウルキオラ先生なんだよね？」

ゆーなが聞いてくる。

「うん。そうやで」

「でもさ、後一週間もすれば冬休みだから、本格的な教師としての仕事は三学期からだね」

そついや、後一週間くらいで冬休みやな。

今年の冬休みは何しよかな。

side out

side ウルキオラ

今俺は高畑と2 - A組の教室に向かう為、廊下を歩いている。

「今日は皆にウルキオラさんの紹介をして、学校の授業がどんなものかを僕が見せて上げるので参考にして下さい」

俺はこいつの補佐みたいなものらしいが、この男は時折用事で授業が出来なくなるらしい。

そこを俺が穴埋めしなければいけない。

とはいっても、後一週間で長期休暇がある。

その後には高畑に替わり新しい先生がこの2 - Aの担任になる。

正直俺の出番は全く無いだろうな。

「此処が僕の担当するクラスの2 - A組だよ」

高畑が足を止め、扉を示す。

「そうか」

俺はその2 - A組の教室の扉を横に開ける。

「あ！ 先に入ったら危ない！」

高畑が何やら慌てて叫んでくる。

と、上から何かが落ちてきたので適当に手で払い飛ばす。

そして、俺が一步中に入ると何かを踏んずけた。
どうやらロープのようだ。

俺が中に入り続けるとバケツが降ってきたり、妙な矢が飛んできた
りしたが、軽く躲す。

この程度なら目を閉じていても十分避けられる。

罨を仕掛けるなら、もっと巧く仕掛けた方が良く。
これなら誰でも避けられる。

「下らんな」

俺は一言そう言った。

「「「す、すごーい！！！！」」」

なぜか俺は女共から歓呼の声が上がった。
俺が何かしたか？

「コラ君達。こんな事をしちゃ駄目だろう」

高畑が教室に入ってくると同時に女共に注意を促した。
そして、高畑が教卓に立ち黒い板に何やら白い棒で俺の名を書く。

「今日から2・A組の副担任をもらうウルキオラ先生だ」

それを言うと高畑は俺の方を見て、目で合図してくる。
俺は女共の方を向き、口を開く。

「ウルキオラ・シファード。今日から此処の副担をする。担当教科
は英語だ。それ以外は何も教える気は無い」

s
i
d
e

o
u
t

8・自己紹介（後書き）

感想やご意見 よろしければお願いします。

9・エヴァとの交渉（前書き）

エヴァンジェリンがキャラ崩壊していたらすいません。

9・エヴァとの交渉

それ以外は何も教える気は無い。

ウルキオラは本当にそれ以外何も教えなかった。

例え、生徒達から質問されようと。

それからウルキオラは高畑の授業を見ながら、昼まで時間をすごした。

side ウルキオラ

昼か。

学校には昼休みという昼食を食べる為の少し長い休憩時間があるようだ。

その間に和泉亜子に言いたい事があったんだが、何処かへ行った。
ベスキス
探查神経を使えば容易く見つける事は可能だが、やらなければいけない事が出来た。

俺は人気の無い森に入る。

誰かが俺を附けている。

「誰だ？」

俺は森の奥に入った処で振り向かずと言った。

「！...」

俺に気付かれた事に動揺したのか少し音を立てた。

「気配は消していたんだが、やはり気付いていたか」

この程度で気配を消していたつもりのか。
もう一度、一から鍛え直した方が良いな。
俺は振り返り、俺を付けていた者を見る。

そいつは2-Aのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとかいう奴だ。

魔力は感じるがこれといって興味を持てる程の者では無い。
だから、名前だけ覚えておくつもりだったが。

「何か用か？」

「少し、貴様に興味があつてな。すまないが付けさせてもらった」

「そうか。だが俺は貴様に興味が無い」

この女が俺に興味あるうが知った事では無い。
それ以前に俺はこいつに何の興味も無い。

一々興味の無い奴に時間を割きたくは無い。

「学園長こっしから貴様の事は聞いた。私も今まで聞いた事の無い種族だ。
破面アラシカルだったか？ 少しだけで良い。その破面アラシカルの力を私に見せてくれないか？」

何を言っているんだ？

なぜ俺が貴様にそんな事をしてやらなくてはならない。

「もし見せてくれたら、私の別荘を貴様に貸してやる」

別荘？

一体何が言いたいんだ？

「貴様はこの冬休み、和泉亜子と何らかの修行をするんだろ？」

！なぜこの女がその事を知っている。

そう、俺が和泉亜子に言いたかった事とは一週間後に来る長期休暇の間に和泉亜子を鍛え上げる事だ。

だが、なぜその事をこの女が知っている？

「和泉亜子からも貴様と同じ力を感じるが、その力は遂この前までは無かった力だ。一体なぜ得たのかは知らないが、貴様と接点があることは学園長（こうえい）から聞いた」

そうか。

こいつは老い耄れから聞いた事を元に憶測したのか。
随分と的を射ているな。

「成程。で、その別荘とは何だ？」

「修行する場としては打って付けの場所とだけ言っておこう」

「…良いだろう。貴様に俺の力の一部を見せてやる。だが、それは貴様の別荘とやらを見た後だ」

もし、修行する場として好適で無かったらこの話は無かった事にする。

好適だったらいつに少しは見せてやっても構わんだろう。

「よし、では今日の放課後で良いか？」

「ああ」

S i d e o u t

こうして和泉亜子は何も知らないまま裏で話が進んでいった事を知らずにいた。

そして放課後、亜子はサッカー部のマネージャーの仕事がある事をウルキオラに伝えようとしたが、職員室には居ない事に気付き仕方なく自分の仕事の方に移った。

そして、殆どの部活が終わり下校時刻になった。

寮まではいつものメンバーで帰り、寮部屋に入った亜子とまき絵はウルキオラがまだ帰っていない事に気付く。

s i d e 亜子

ウルキオラさん遅いなあ。

何処で何してるんやろ？

「ねえ、亜子。ウルキオラ先生って残業なの？」

「多分ちゃうと思うけど」

まだ教師に入ったばかりで残業は無いやろ。
多分やけど。

「でも、もう7時30分過ぎたよ。先に夕飯食べる？」

まき絵が壁に掛けてある時計を見て言った。
たしかにもう7時30分を過ぎてもってる。

「そうしょっか」

まき絵の言う通り、ウルキオラさんが帰る前に先に二人で夕飯を済ませた。

せやのに、まだウルキオラさんが帰ってこようへん。
幾らなんでも遅すぎるやろ。

「あれ、そういえば亜子ってウルキオラ先生の携帯番号知らないの？」

「知ってるけど…。！あ、その手が有ったやん！」

自分でも何で気付かんかったのやろ。

ウチは直ぐに携帯でウルキオラさんに電話を掛けようとしたが、する必要は無くなった。

ウルキオラさんが部屋の扉を開けて入ってきた。

「あれ、ある意味グッドタイミングで帰ってきたじゃん」

まき絵が言う。

「あの、ウルキオラさん。今まで何処に居た」

「和泉亜子」

ウチのセリフをウルキオラさんに途中で遮断された。

「冬休みの間、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの別荘で過ごす」

何か…いきなり帰ってきて、とんでもない事を言われた。

s
i
d
e

o
u
t

9・エヴァとの交渉（後書き）

感想やご意見　よろしければお願いします。

10・修行場へ

ウルキオラがああ発言をしてから直ぐに一週間が経った。
表では教師の仕事…といっても今は研修中みたいなもの。
裏では一般の人には知れてはいけない仕事。

この二つの仕事を両立しながらこなした。
そして、この冬休み和泉亜子とウルキオラの姿が学園から消えた。

side エヴァ

まさか、このような下らん学園生活で私の興をそそる者が現れるとは思ってもみなかった。

今日は面白いものが見れそうだな。

「うきうきとしていますねマスター」

茶々丸が私の心中を察したようだ。

「当たり前だろ。私すらも知らない力を見れるのだ。当分の間は暇をせずに済む」

この学園生活は本当に暇で仕方なかった。

けど、ようやく私の暇を潰してくれる者が現れた。

この冬休みの間は…いや、奴が私の前から消えるまでは退屈せずに済みそうだ。

アランカル

破面…それについて、あらゆる方法を用いて調べてみたが何一つ情報を得る事が出来なかった。

奴からは私も感じたことの無い力を感じた。

その力は霊圧というらしいが、どれ程の力かは知らない。
いや、恐らく魔法世界でも知っている奴は居ないだろう。
可能性があるとすれば和泉亜子くらいか。

クラスでも特に目立っていないなかつた小娘が…もしかしたら私を超える力を持っている。

気分の良い話しでは無いな。

まあいい、それもまた一興。

ウルキオラは恐らく価値の無い戦いはしない。

即ち、私とは手合わせしてくれないだろう。

そこで、和泉亜子に力を着けて貰い、いつでも私と戦い霊圧という力を詳しく調べさせてもらえるようにする。

和泉亜子の事だ。

私の頼みは断れないに決まっている。

ふむ、我ながら良い策略だ。

「マスター、悪い顔になっていますよ」

「ん、そうか」

どうやら無意識の内に顔がにやけていたみたいだ。

「そろそろウルキオラ先生が来る時間だな。茶々丸、粗相のないようにしろよ」

「はい、マスター」

いや、茶々丸が粗相を犯した事などなかったな。
あるとすればチャチャゼロくらいか。

カランコロン

家の鈴の音が鳴った。
来たみたいだな。

Side out

二人がエヴァ宅に着くちょっと前。

side 亜子

何でウチがこんな目に。

今ウチはウルキオラさんとエヴァンジェリンさんの暮らしてる家に向かっています。

ウルキオラさんが言うには冬休みの間、そこでウチを鍛える？らしい。

最初は断ったけど、ウチの不思議な力は悪い人達に狙われやすいみたいなんや。

だから、自分の身は自分で守れるようにならんといけないらしい。学園長や高畑先生にも同じ事を言われた。

欲しくてこんな力を手に入れたんとちゃうねんけどな。

それにウチは血とかケンカは絶対に無理やし。

エヴァンジェリンさんとも全く喋った事無いし。

不安だらけや。

「ウルキオラさん、ウチ、強くなるんは多分無理やと思うねんけど。血を見ただけで気絶してまうし」

「遣る前から弱音を吐くな。血を見て気絶するなら、血を見ないよにすればいい」

血を見んように…。

いや、その前に戦いつても無理なんやけどな。

「和泉亜子。今のお前の力は俺と同等だ。だが、まだその力を巧く使う事が出来ない。だから、この冬休みの間に俺がお前を鍛える。自分の身を守るくらいにな」

それってやつぱ、筋トレみたいな事をするんやろか？

ウチ力無いねんな。

それにまき絵達には殆ど話さんと来たし。

一応、置手紙は置いてきたけど。

心配…するやるな。

「でも、ウチを冬休みの間だけで強くするなんて無理やと思っけど」

あ、また弱音吐いてもうた。

「心配するな。修行をする場は特別な所だ。嫌でも強くなれる」

何か、怖いんですけど。

嫌な予感しかせえへん。

でも、現実から逃げてばっかじゃあかんし。

こうなったら嫌でも強くならんとな。

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが修行場として貸してく

れる別荘はかなり広い。

しかも別荘の中での24時間が外では1時間しか経っていない事になる。

妙な場所だが修行場としてはこれ以上に無い場所だ。

存分に亜子を鍛え上げる事が出来る。

「最良で十刃のNo.8（オクターバ）レベル。最悪、十刃落ち（エスパーダ）
プリバロン・エスパーダ）レベルには成ってもらう」

「あの、何か言いました？」

どうやら口に出ていたようだな。

「いや、何でも無い」

まあ、和泉亜子には俺の霊圧の半分が有るんだ。

心配は無いな。

それに和泉亜子に才能が有れば、今の俺を超える可能性もある。

存分に鍛えさせてもらうぞ、和泉亜子。

そんな事を考えている間にエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの自宅に着いた。

S i d e o u t

10・修行場へ(後書き)

感想やご意見 よろしければお願いします。

11・修行開始

ウルキオラと亜子はエヴァンジェリンの住む家へとやって来た。外装はログハウスで中々洒落ている。

正面玄関の鈴を鳴らすとエヴァンジェリンが出てきた。

亜子はペコリと頭を下げ挨拶をする。

その姿を見たエヴァは少し微笑み、二人を中へと入れた。

side 亜子

「さあウルキオラ先生、和泉亜子。中へ入ってくれ」

初めてエヴァンジェリンさんにウチの名前を言われたような気がする。

エヴァンジェリンさんに言われた通りウルキオラさんとウチは家の中に入ってた。

「うあゝ」

人形だらけや。

テーブルの上にも、ソファの上にも、椅子の上にも、色んな所到人形が置かれてある。

ウチも人形は好きやけど、こんなには無いわ。

「何をしている？ 和泉亜子。早くこっちへ来ないか」

エヴァンジェリンさんがウチを呼んだ。

「え、あ、はい！」

いつの間にかウルキオラさんとエヴァンジェリンさんが地下室へ続く階段の前にいた。

ウチは急いで二人の方に行く。

「こつちだ」

エヴァンジェリンさんがウチの方を一瞥し、階段を下りていった。改めてエヴァンジェリンさんを見ると、本当に人形みたいで可愛いなあ。

…ってウチ何見惚れてんねんやろ。

エヴァンジェリンさんの誘導でウチとウルキオラさんは下の階、地下室に行く。

ログハウスに地下室はあんまイメージに無かったな。

地下室に到着すると、また沢山の人形が目に入った。

どんだけ人形が好きやねんやろ。

そして、その地下室の先の方に台に置かれた大きな水晶玉のような物がある。

でも水晶玉にしてはあまりにも大き過ぎるからちやうやろな。

エヴァンジェリンさんとウルキオラさんがその水晶玉の方に歩み寄ってる。

「此処だ」

此処？

え…この地下室で修行すんの？

「早くこつちに来ないか和泉亜子」

エヴァンジェリンさんが手招きをしながら言った。
「何や、よく分からんわ。」

「あれ、近寄ってみて分かったけど、水晶玉の中にミニチュアの塔の建物みたいなのが入ってる。」

それに水晶玉にEVANGELINE'S RESORTと書かれてある。

カチッ

何や変な音がしたような。

「……………あれ、ここどこおおー！！！！？」

「何や何や一体どうなってんねん！！？」

「え、あれ、気付いたら何や意味分からん所に居た！？
此処は外！？」

「何で！ さっきまで地下室に居たはずなのに！？」

「それに全く見覚えの無い場所やし！？」

「っていうか…アカン、頭が回らん！」

「動揺しすぎだぞ和泉亜子」

エヴァンジェリンさんに注意されて、ちょっとだけ平静を取り戻した。

「エヴァンジェリンさん此処って」

「説明は後でしてやる」

「ウチが此処について聞こうとしたら、エヴァンジェリンさんに止められた。」

後でじゃなくて今してほしーわ。

そんな事を思っているとエヴァンジェリンさんとウルキオラさんが既に歩き出してた。

何かウチ、置いてかれてばっかや。

ウチは二人に付いて行く。

何や今メツチャ高い橋を渡ってる。

どうやら、橋の向こうの大きい塔の上に繋がってるみたいや。

って、何でこんな高い橋に手スリも何も無いねん！

そんなこんなで、ようやく塔の上にやって来た。

橋を渡るだけでかなり体力使ってもうた。

此处、橋を渡ってる時に思ったけど、あの水晶の中の塔の建物に似てるな。

…いや、多分そうだと思う。

恐らくウチは水晶の中に入れられたんだと思う。
魔法とかいうやつで。

「マスター、ウルキオラ先生、和泉さん。お待ちしております」

と、ウチらの元にメイド姿の絡繰さんが現れた。
いきなり現れて、ちよっとビックリした。

「和泉さんは随分と疲れていらっしやいますね。今、お飲み物をお持ちします」

「え、あの大丈夫です…」

と、言ったのだけど絡繰さんが行ってしまった。
橋を渡るだけで疲れてるんじゃ、自分の事ながら先が思い遣られるわ。

…ここ、何か凄い場所やな。

南国のリゾートに来たみたいやわ。

ウチらは天井のある場所に行き、エヴァンジェリンさんが石台に腰を下ろした。

「では、この別荘の説明をしてやろう」

別荘？

ここ別荘なん！？

そういえば、ウルキオラさんがここに来る前に別荘で過ごすとか言ってたっけ。

「この別荘は私が造った所で、一度入れば丸一日は出られん。それに、ここで一日過ごしても外では一時間しか経過していない事になっている。どうだ、凄いだろ」

凄いも何も、もう言葉で言い表されへんわ。

もう、何があっても驚かん気がする。

それに、説明はそんだけ？

「では早速、ウルキオラ先生。約束通り、力の一部を私に見せてくれ」

え、ウルキオラさん。

そんな約束してたの。

「和泉亜子さん。お飲み物をお持ちしました」

突然ウチの背後に絡繰さんが飲み物を持って現れた。

「うあっ！」

急に現れたせいで驚いてもうた。

何があっても驚かんって思って数十秒後に驚いてしまうなんて…。
自分でも嫌になるわ。

S i d e o u t

s i d e エヴァ

私達は塔の端に移動した。

ようやく待ちに待ったウルキオラ先生の力の一部を見れる。

一部だけだが、その一部だけでも結構期待できる。

何たって私の知らない力だからな。

「行くぞ」

ウルキオラ先生はそう言うと、人差し指を塔の下の方に向けた。
一体何をするつもりだ？

「今から放つ技は和泉亜子。貴様にも習得してもらう技だ。良く見ておけ」

和泉亜子にも覚えてもらう技か。
つてことは基本的な技か。

まあ、見れば何でも良い。

「！！！」

突然、何か重い圧力を掛けられたような力をウルキオラ先生から感じた。

いや、今も感じる。

これが霊圧という力か。

凄まじい力だ。

と、ウルキオラ先生の人差し指の先端から碧色の光を出した。どうやら力を指先に集中させているようだ。

「虚閃^{セロ}」

ウルキオラ先生が技名を言った瞬間、指先から溜めていた力が放たれた。

その閃光が海と衝突し、凄まじい爆発が起きた。

海の水が飛び散り、この高い塔まで海の水が優に飛んできた。

「凄い」

私は無意識にそう呟いてしまった。

和泉亜子は驚きの余り、目を丸くしている。

「これで良いか？」

「…充分です」

充分過ぎる。

これで一部だと思うと少し恐怖を覚えるな。

いや、もしかしたら一部すら出していないのかもしれない。

この冬休みは期待通り、楽しめそうだ。

S i d e o u t

s i d e ウルキオラ

虚閃^{セロ}を放って改めて分かった。

やはり力が十分に出せない。

霊圧が半分消えたせいか。

帰刃に支障がなければいいが。

「和泉亜子。お前にはこの技をこの程度の威力で放てるようにしてもらおう」

「…え、はい」

俺の言葉に我に返ったらしいな。

「それと最低、虚閃^{セロ}の他にも基本的な技の響転^{ソニード}、虚弾^{バラ}、探查回路^{ベスキス}、
解空^{デスコレル}、そして少し上級になるが王虚の閃光^{グラン・レイ・セロ}を習得してもらおう。他にも俺の知る様々な技等も覚えてもらう。少し時間に余裕が出来たら自分だけの固有技も創ってもらう。良いな」

「は、はい！」

「…だが、まず先に克服してもらわなければいけない事があるな。
和泉亜子は血に弱い。」

いくら強くなっても、血を見ただけで気絶するのでは話にならない。
…時間を掛けて克服させるしか無いか。

「では準備しろ。早速開始する」

S i d e
o u t

こうして和泉亜子はウルキオラによる過酷な修行が始まった。

11・修行開始（後書き）

感想やご意見 よろしければお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2544w/>

虚無と立派な魔法使い

2011年10月10日02時55分発行